

道徳教育と教育相談の連携の可能性について

— これからの「道徳の指導法」の一考察 —

岩 瀧 大 樹

I 問題と目的

不登校や引きこもり、非行などの学校不適応は、依然として教育現場での指導・対応が大きな課題となっており、特に近年ではいじめ問題の取り組みが広く見直されている。2006年には、いじめによる自殺予告文書が文部科学省に届けられ、当時の文部科学大臣による緊急声明が出された。また、いじめの影響が予想される凄惨な事件は、残念ながら枚挙に遑がない。現在、いじめ問題に関しては、「発生件数」ではなく、「認知件数」として、いじめ被害を受けている子どもたちの立場でとらえる。この点を踏まえ、学校基本調査（文部科学省、2015a）は、2014年度のいじめの認知件数を小学校で約122,000件、中学校で約53,000件であること、児童生徒1,000人当たりの認知件数が13.7件であることを明らかにする。この問題は深刻であり、迅速な周囲の支援者・指導者たちの積極的指導・介入が不可欠となる。

これらの問題は、教育相談や生徒指導などが主となり、様々な教員や支援者により実践が蓄積されてきた。教育相談や生徒指導は、かつては「治療的」とされた「問題解決的」のみならず、「開発的」、「予防的」といったアプローチも実施する。しかし、今回の学習指導要領改訂で文部科学省（2015b）は、「道徳教育の改善に関する議論の発端となったのは、いじめの問題への対応」であることを示し、道徳教育が大きく関わる必要性を述べる。征矢野（2016）は、道徳の教科化をはじめとする道徳教育の修正は、いじめ問題に対する学校現場の対応が追いついていない現状にあり、教員の道徳の指導力が影響する可能性や、その結果としていじめが発生し、子どもの心が十分に育っていないことを主張する。

さらに文部科学省（2016a）は、“文部科学大臣からのメッセージ”として、「いじめに正面から向き合う「考え、議論する道徳」への転換に向けて」を発信し、その中で、「特別の教科 道徳」の充実が重要であることを述べ、いじめ防止には意見を言ったり書いたりするだけの道徳ではなく、「現実のいじめの問題に対応できる資質・能力」を育むことが急務であり、多面的・多角的に事例などを取り上げ、考え、議論する取り組みの積極的導入を要請する。

以上のことから、道徳の教科化のみでは、いじめ問題への対応に不十分である可能性があげられる。そこで、本研究では、道徳教育とともに「心の教育」を中心に上げる教育相談との関係を検討し、今後の実践の可能性について論じる。しかし、両者の関係を考察した先行研究は、論文検索サイトを用いた概観で、1990年代から2000年にかけて散見されるものの、非常に少ない。ゆえに本稿では、道徳教育と教育相談との相互関係や有機的な連携について、その在り方および指導の可能性を探る。

II 学習指導要領改訂の背景

文部科学省（2015c）により、学習指導要領の一部改訂が告示され、そこで、「道徳」が「特別の教科 道徳」（以下「道徳科」）として改められた。中央教育審議会（2014）での「道徳に係る教育課程の改善等について」の答申によるものである。文部科学省の有識者会議「道徳教育の充実に関する懇談会（第9回）」（文部科学省，2013）での、「道徳の教科への格上げ」が社会でも広く論議され、上記の改訂により、2018年度からは小学校、2019年度には中学校で、「道徳科」として、学校現場で取り上げられる。文部科学省（2015b）は、「道徳教育は、教育の中核」であり、「学校のあらゆる教育活動を通じて行われるべきものである」という基本的スタンスをもとにしつつ、その役割を十分に果たすべく、改善を図ることを提言する。

しかし、これまでも道徳教育は、学習指導要領の改訂に際し、新たな提言をしてきた。前回の改訂では、小学校学習指導要領解説道徳編・中学校学習指導要領解説道徳編（ともに文部科学省，2008a，2008b）の基本方針として、「道徳教育や体育などの充実による、豊かな心と健やかな体の育成」が示され、この「豊かな心」を育成するため、「発達段階に応じた指導内容の重点化」、「体験活動などの導入」、「役割演技の導入」が明記されている。以前からも、「心」を育成する道徳教育へ大きな期待が寄せられているのである。当然これまでも多くの研究者や実践者たちが、この点を踏まえ、道徳教育の検討・実践を行っていたことは想像に難くない。ここで改めて、なぜ「いじめ問題」の文脈に加え、道徳教育が大きな変化を迎えたかを振り返ってみたい。

1. 社会的背景の影響

例えば、池田（2016）は、特設以来約60年経過した現在での道徳の「教科化」に疑問を投げかけ、その背景として、「少年犯罪厳罰化の流れと軌を一にした、社会における子ども観の変容」を指摘する。

さらに佟（2015）は、1958年の「道徳」の特設の背景として、「子どものしつけをしようとする国民の道徳教育の要求」と「国民の愛国心を涵養しようとする政府の道徳教育の要求」の高揚が学校教育に期待した点で一致したことをあげ、今回の「道徳科」に関しても、学校不適應問題の深刻化により、「道徳」が社会的にうまく機能していないがために、見直しを求めている点では共通すると論じる。加えて、中元（2015）は、近年の日本全体での道徳性の低下を懸念するとともに、道徳性の水準を上げる学校の道徳教育が戦前から現在まで停滞している可能性に触れ、「現実の社会生活から切り離された道徳教育」の改善が必要だと主張する。これらの先行研究の提言より、今回の改訂の背景には、道徳教育に対し、いじめ問題のみならず少年犯罪や非行などの反社会的問題および学校不適應問題への関わりも期待されていることが推測される。そのため、これまで上記の反社会的問題や学校不適應問題に関わってきた、教育相談の理論や方法、技術などを有機的に活用し、子どもたちの道徳性の育成を支える可能性を改めて検討すべきである。

また、近年はフリーターやニートの増加や、雇用形態の多様化、経済的・社会的背景からも、「先の見通しの難しさ」が指摘され、それに伴う問題への柔軟的な対応が迫られている。ゆえに、キャリア教育やキャリアカウンセリングの必要性が示され、今回改訂された「道徳科」の小中学校の学習指導要領（ともに文部科学省，2015b，2015d）でも、その点が明示されている。例えば、小学校において

は、「A 主として自分自身に関すること」の内容項目で、第1学年及び第2学年では、「(ア) 自分のよさを生かし伸ばすことを重視して「自分の特徴に気付くこと」を新たに加えた」、第3学年及び第4学年では、「(ウ) 主体性をもって個性を伸ばすことができるようにするために「よい所を伸ばす」を「長所を伸ばす」に改めた」、第5学年及び第6学年では、「(ウ) 個性の伸長に際して、長所及び短所を明確にするために「悪い所を改めよい所を積極的に伸ばす」を「短所を改め長所を伸ばす」に改めた」などの記載が見られる(文部科学省, 2015d)。また、中学校においても、「C 主として集団や社会との関わりに関すること」の内容項目で、「(イ) 「勤労」について、勤労の貴さや意義の理解を一層重視し、(中略)「奉仕の精神をもって、公共の福祉と社会の発展に努める」を「将来の生き方について考えを深め、勤労を通じて社会に貢献すること」に改めた」などの改訂が行われている(文部科学省, 2015b)。以上の点から、社会的背景も踏まえ、近年では、自己理解、自己成長、社会貢献などの観点から、道徳教育においてもキャリアカウンセリングの基礎的事項の活用は不可欠といえる。進学や就職のみならず、自己理解を深め、自分自身が主体的にライフキャリアをデザインできるような基本的価値観に気づかせ、育てることが重要となる。その具体的なプロセスや、体験の機会として、道徳教育を機能させることが課題となる。

2. 資料・読み物資料の見直し

今回の改訂では資料の創意工夫を生かしつつ、「検定教科書」が導入されるが、これまでの学習指導要領でも、道徳教育の充実に資すべく、「心のノート」や「私たちの道徳」などが広く活用され、その都度見直しや修正がなされてきた。この先行資料は、ディスカッションや、気づきの整理など、「話す」・「書く」などの活動を積極的に取り入れ、児童生徒に自問自答を投げかけるなど、作成・編集に際する多くの工夫がなされている。

しかし、道徳に関しては、資料の読み方・提示の工夫について試行錯誤されているが、“読み物道徳”などの批判を受けることが少なくない。新学習指導要領(文部科学省, 2015b)でも、「読み物の登場人物の心情理解のみに偏った形式的な指導」をあげている。

さらに、“特別の教科に関するQ&A”においても、道徳に改善が求められる背景として、読み物を読み、感想を述べるだけに終始してしまう点を指摘する(文部科学省, 2016b)。

また文部科学省のみならず、研究者もこの点を見直し、長谷(2016)は、従来の「道徳の時間」に関しては「読み物資料を通して、主人公や登場人物の言葉や行為から、その心情を想像し、理解するという流れが多かった」ことを示し、道徳的心情を高めるという効果がある反面、心情理解への偏重や、道徳的判断力の向上への限界を指摘する。これらのことから、読み物資料には効果的な側面と、限界のある側面があり、指導に際しては、読み物資料と、その他の資料や活動を併用させる必要性があると判断できる。具体的には、読み物を“読んだまま”にしてしまうのではなく、他の資料(映像や図表、さらなる読み物など)とリンクさせたり、「話す」・「書く」などの具体的な表現活動とともに取り上げたりすることで、効果的にねらいに迫ることが要件となる。

新川(2016)も、読み物資料に関しては、登場人物の心情を場面の推移で答えていくだけのものでは、子どもたちは従来の道徳的価値観をなぞらえるだけになる可能性を提言し、他者と考えを交流したり、吟味したりする活動を取り入れることが課題であると述べる。この背景にはいくつかの理由があげられるが、そのひとつとして、前述の「いじめ問題」への効果的な関わり方がある。子ども

たちが道徳で取り上げられた問題に対し、目を背けたり、無視したりするのではなく、自身に何ができるのか、どのように行動すべきなのかなど、具体的かつ身近な問題としてとらえることが鍵になる。日常生活や学校生活で発生している出来事などとの関わりを、指導者が子どもたちに対し、効果的に示唆したり、葛藤させたりすることが重要となる。指導者は、日常から子どもたちの様子や発生しているイベントを把握し、適切なタイミングで考えられる機会を提供すべきである。

3. 「考える道徳」「議論する道徳」へ

今回の学習指導要領改訂による道徳科の設置は、読み物資料を中心とした実践を、より有機的なものにすべく、かつ「答えが一つではない課題に道徳的に向き合う」という観点から、「考える道徳」や「議論する道徳」への質的転換と、道徳教育の充実・強化をねらいとしている（文部科学省，2015e）。

岡田（2015）は、道徳での倫理的な問題には、絶対的な価値観は存在しないと論じ、絶対的な答えのある各教科と一括りになり、「その中で学んだことが紛れもなく正しいことであるという概念を押し付けることになりかねない」点、作田・中山（2016）は、指導者による「価値の教え込み」になる点を懸念している。これらの先行研究より、今後実践者・指導者が念頭に置くべきことは、考えたり話し合ったりする共通項としての「読み物資料」は必要であるが、読んだ内容を有機的に活用し、話し合い、議論し、考える道徳へのソフトチェンジである。ここには、「特定の価値観を押し付けたり、主体性をもたずいわれるままに行動するよう指導したりすることは、道徳教育が目指す方向の対極にある」、「多様な価値観の、時に対立がある場合を含めて、誠実にそれらの価値に向き合い、道徳としての問題を考え続ける姿勢こそ道徳教育で養うべき基本的資質である」という2014年10月の「道徳に係る教育課程の改善等について」の答申がもととなる（文部科学省，2015b）。

また、話し合いの工夫は学習指導要領でも指摘されているが、渡邊・岩尾（2016）は、意見を出し合うことにとどまる可能性を問題視し、より効果的な話し合いによる学習の必要性や、話し合いの意義や構造を明らかにする、話し合いのルールへの指導が重要であると述べる。議論を含めた話し合い活動では、計画的な指導がなければ、子どもたちが混乱に陥るのは必至である。「私たちの道徳」でも機会は設定されているが、より充実したディスカッションのためにも、指導者は話し合いのスキル習得を促進すべきである。

徳永（2016）は、現状の道徳が道徳的価値の「教え込み」に終始し、子どもたちに「偽りの自己」としての「良い子」を演じさせる「隠れたカリキュラム」となっている可能性をあげ、モラルディスカッションを通じて、「共同体や仲間に対して責任を担う主体性のある子ども」の育成が重要だと主張する。以上のことから、「考える道徳」「議論する道徳」への転換をしつつ、その「質」に関しても、指導者は常にその「指導の方法」について研鑽する必要に迫られている。

Ⅲ 道徳教育と教育相談

1. 道徳教育と教育相談との関係

まず、「車の両輪」として譬えられることの多い道徳教育と、教育相談と生徒指導との関連について述べる。生徒指導提要（文部科学省，2006）は、生徒指導が道徳的実践の指導において重要な役割を担うことを指摘し、「道徳教育で培われた道徳性や道徳的実践力を、生きる力として日常の生活場面に具現できるように援助することが生徒指導の働き」と明示し、両者の密接な関係と相互作用の可能

性に言及する。さらに、「道徳の授業」と生徒指導の相互補完関係について述べ、人間関係や自主性の育成などと関係が重要だと指摘する。

一方、教育相談の観点からは、前述したが、両者の連携に関する先行研究は非常に少ない。教育相談の主な内容や取り組みについて、日本学校教育相談学会（2008）は、教育相談の知識とスキルのため研修・研鑽を進めるべく、研修用テキストで64の研修領域を提示する。その内容は、構成的グループエンカウンター（Structured Group Encounter; 以下SGE）や、キャリアガイダンス（キャリアカウンセリング・キャリア教育）、ロールプレイング、ソーシャルスキルトレーニング（Social Skill Training; 以下SST）、認知行動療法、心理アセスメント、心理査定などのカウンセリングの知識やスキルとともに、いじめ問題の理解や、人間関係の深化なども取り上げ、学校不適応問題への関わりのみならず、その予防や、「心の教育」に関しても網羅する。この点から、「心の教育」を取り上げる際には、問題への関わりのみならず、子どもたちの成長を促進させる観点からも、道徳教育と教育相談には、生徒指導と同様の相互作用が予想できる。「心の教育」に重なる点が多い。また、押谷（2015）は、近年の道徳教育から教育相談への期待として、①モラルカウンセリングの提案（道徳的価値意識の育成と、こだわりへのアプローチ）、②道徳的価値のとらえ方についての対応（将来の夢や希望を描きながらよりよく生きる支援）を提唱する。以上のように、いじめ問題のみならず、様々な教育上の課題に対し、道徳科も絡めた、道徳教育と教育相談との新たな連携、協力がなされることで、より各々の指導や支援の充実が期待できる。

2. 内容項目との具体的な関連

改訂に際し、若干修正されたものの、道徳科の内容に関しては、従来の4つの視点（1 主として自分自身に関すること、2 主として他の人とのかかわりに関すること、3 主として自然や崇高なもののかかわりに関すること、4 主として集団や社会とのかかわりに関すること）が、子どもたちの対象の広がりに基づき、改めて「A 主として自分自身に関すること、B 主として人との関わりに関すること、C 主として集団や社会との関わりに関すること、D 主として生命や自然、崇高なものとの関わりに関すること」の順序に整理されて示され、小学校第1学年及び第2学年では19、第3学年及び第4学年では20、第5学年及び第6学年と中学校では22の内容項目が設定された。ここでは、視点ごとに、主な内容項目と教育相談で取り入れられている理論や技法との関連を、小学校・中学校の両方での取り組みを概観すべく、特に小学校高学年、及び中学校に焦点を当てる。

（1） A 主として自分自身に関すること

① 向上心、個性の伸長

第5学年及び第6学年で「(4) 自分の特徴を知って、短所を改め長所を伸ばすこと」、中学校の「(3) 自己を見つめ、自己の向上を図るとともに、個性を伸ばして充実した生き方を追求すること」が示されているが、これらは、キャリアカウンセリングにおける「自己理解」と関係する部分が大い。例えば、自己理解テストなどの簡単な心理テストやアセスメントツールを用いて、自己の長所や短所に気づく取り組みも有効となる。また、SGEなどのグループワークの活用も可能である。例えば、SGEでは「ポジティブリフレーミング」などが実践されている。これは、自分自身が短所だと感じている部分に対し、多面的な見方をしたり、他者からのフィードバックを受けたりすることによ

って、短所をポジティブにとらえられるようにするエクササイズである。短所の修正も大切であるが、そのみに陥らず、幅の広い見方ができるような支援も必要である。

② 希望と勇気、克己と強い意志

第5学年及び第6学年で「(5) より高い目標を立て、希望と勇気をもち、困難があってもくじけずに努力して物事をやり抜くこと」、中学校で「(4) より高い目標を設定し、その達成を目指し、希望と勇気をもち、困難や失敗を乗り越えて着実にやり遂げること」が示されているが、この項目も①と同様にキャリアカウンセリングとの関連が読み取れる。適応状態であれば自己概念の「理想自己」と「現実自己」が重複する領域は広いが、この両者が離れた際には不適応状態となる (Rogers, 1980)。この支援に関して、近年、カウンセリングの一大流派となりつつある認知行動療法の技法である「問題解決技法」の活用を提案する。これは、目標とする行動(状態)は複数の段階で成り立つことを確認し、目標と現実とを照合させ、現実在即した目標を再設定し、折り合いをつけることをねらいとする。また、「困難」に関して、自分自身の考え方の「クセ」を知る、あるいはアセスメントツールとして Goleman ら (2002) が指摘する情動知能 (Emotional Intelligence Quotient) などを活用し、その構成因子である自己の「柔軟性」に気づき、現在の問題とすり合わせることで、目標達成に向けた見方を広げることが見込める。

(2) B 主として人との関わりに関すること

① 思いやり、感謝

第5学年及び第6学年で「(7) 誰に対しても思いやりの心をもち、相手の立場に立って親切にすること」、中学校で「(6) 思いやりの心をもって人と接する(以下略)」が示されているが、この項目に関しては、SSTなどの導入に着目する。この点に関しては、既に林(2008)により「モラルスキルトレーニング」として実践化が進められ、適切なスキルの習得が、「思いやり」の向上につながる事が示されている。以上のことから、SSTなどの行動(アクション)へはたらきかけることは、道徳的行為そのもののみならず、その行為をしようとする動機にも大きな影響を与えると判断できる。SSTも認知行動療法のひとつの技法である。認知行動療法では、個人内の「認知(考え方)・行動・感情・身体反応」は各々相互作用するものととらえ、問題を抱える際にはこれらを整理し、最も介入のしやすい部分からアプローチをする。この理論をもとにすれば、スキルなどの行動から関わり、行動が変容されれば、認知(考え方)の変容も期待される。スキルの習得により、道徳性の育成も十分可能といえる。

② 礼儀

第5学年及び第6学年で「(9) 時と場をわきまえて、礼儀正しく真心をもって接すること」、中学校で「(7) 礼儀の意義を理解し、時と場に応じた適切な言動をとること」と示されているが、①と同様にSSTの導入が期待される。文部科学省(2015b)は具体的な事項として「言葉遣い」や「態度」「動作」などの社会生活の秩序を保つために守るべき「行動様式」を明記する。この点に関しては、既に相川・佐藤(2006)などにより、挨拶や断り、適切な自己主張などのSSTの実践が紹介され、さらに西村(2008)により敬語なども含めたSSTの実践も開発されている。内容項目としても具体的な行動やふるまいが示されており、積極的に道徳教育で取り入れる価値があるといえる。

人間関係やコミュニケーションを円滑にするためのツールがソーシャルスキルである。様々な文脈

で摩擦やすれ違うことは現実社会では不可避であるが、上記の「言葉遣い」や「態度」などのある程度のソーシャルスキル習得は、周囲との関係構築や、問題の重篤化予防につながる。指導者には、子どもたちの日常生活・学校生活を中心とした、様々な場面で活用が求められるスキルを精選し、指導の観点を見出す必要がある。

③ 友情・信頼

第5学年及び第6学年で「(10) 友達と互いに信頼し、学び合って友情を深め(中略)、人間関係を築いていくこと」、中学校で「(8) 友情の尊さを理解して心から信頼できる友達をもち、互いに励まし合い、高め合うとともに(中略)、悩みや葛藤も経験しながら人間関係を深めていくこと」が示されているが、これらの項目に関しては、「人間関係」の構築がキーワードとなる。この点には、特にSGEが強く関連するといえる。SGEは、第一人者の國分康孝により、学校現場へ取り入れられるとともに、その効果も多くの先行研究で実証されている(佐々木・菅原, 2009など)。人間関係づくりなどで広く用いられている手法である。道徳教育でも、先行事例として、諸富(2002)がグループワーク(エンカウンター)の導入を紹介・提唱する。

しかし、ここで重要となるのが、エクササイズのみを目を向けるのではなく、エクササイズから何を考え、感じたのかを振り返るといったシェアリングの位置づけである。上記のグループワークは、活動自体にアイスブレイキングや、楽しさなどの要因もあげられるが、それのみに終始してしまうと、そこからどんな体験ができたのか、何を新たに発見したのかという、ねらいとのすり合わせが軽視される虞が発生する。ゆえに、道徳教育でエクササイズなどを取り入れる際には、そこでの体験や得られた知見を、改めて言語化し、自身の価値観や考えの変容を把握するプロセスを重視すべきである。前述の読み物資料を“読んだまま”にしないのと同様にとらえる。

④ 相互理解・寛容

第5学年及び第6学年で「(11) 自分の考えや意見を相手に伝えるとともに、謙虚な心をもち、広い心で自分と異なる意見や立場を尊重すること」、中学校で「(9) 自分の考えや意見を相手に伝えるとともに、それぞれの個性や立場を尊重し、いろいろなものの見方や考え方があることを理解し、寛容の心をもって謙虚に他に学び、自らを高めていくこと」と示されているが、これらは、教育相談で取り上げる「主張スキル」や「傾聴スキル」と関わる。特に「議論する道徳」において、これらは必要不可欠なものとなる。ディスカッションの機会を設けても、子どもたちのレディネスが不十分な状態では、本来のねらいを十分に達成することは難しい。ゆえに、このスキルに関しては、道徳教育のみならずあらゆる教育活動の中で積極的に習得の機会を設定し、発達段階に応じてブラッシュアップさせねばならない。指導者があらゆる学習活動の計画の中に、適宜取り入れ、話し合いの質を向上させていきたい。

(3) C 主として集団や社会との関わりに関すること

① 勤労

第5学年及び第6学年で「(14) 働くことや社会に奉仕することの充実感を味わうとともに、その意義を理解し(以下略)」、中学校で「(13) 勤労の尊さや意義を理解し、将来の生き方について考えを深め、勤労を通じて社会に貢献すること」と示されている。この部分は、既に職場体験学習などとの関連が指摘されているが(文部科学省, 2008b)、重要なのは、「職業や勤労に対する価値観が多様化

する（文部科学省，2015b）」という点である。特に「将来の生き方についての考えを深め」の観点から、キャリアカウンセリングの方法が活用できるだろう。例えば、宮城（2007）は、「キャリア・価値分析」が、様々な価値観の中から最も自分が大切にしたい価値観を理解し、今後のキャリアの方向性を明確化するために有効な方法であることを指摘する。キャリアカウンセリングでは、「働くこと」と、そのために「学ぶこと」、それらの経験を蓄積して「生きること」を同義でとらえ、自己のキャリアデザインを支援する。その中核には、自分自身が大切にし、重視する価値観がある。この方法の活用により、上記で示されている「働くこと」を、より身近なものとして把握し、「生きること」につなげることが期待できる。

② よりよい学校生活，集団生活の充実

第5学年及び第6学年で「(16) (略) みんなで協力し合ってよりよい学級や学校をつくるとともに、様々な集団の中での自分の役割を自覚して集団生活の充実に努めること」、中学校で「(15) (略) 学級や学校の一員としての自覚をもち、協力し合ってよりよい校風をつくるとともに、様々な集団の意義や集団の中での自分の役割と責任を自覚して集団生活の充実に努めること」に関しては、「集団づくり」が背景になっている。「集団づくり」では、前述のSGEのほか、対人関係ゲーム（田上，2003）のような様々なエクササイズなどが検証されている。特に近年では、ピアカウンセリング（ピアサポート，ピアラーニングなど）の取り組みも着目され、中でも「いじめ予防」への効果を指摘する先行研究も散見される（折出・福田，2004，戸田，2013など）。これらの取り組みでは、「協力して取り組む」、「集団の中で自分の役割を考える」、「迅速な問題解決には何をしたらいいか」などを体験的に学べる様々なプログラムが展開されている（滝，2004など）。SGEのシェアリングと同様に、ただ体験するだけではなく、そこから考えたこと、感じたことを話し合ったり、意見交換をしたりすることが、集団生活の充実に資する。なお、今回の改訂では、問題解決的な道徳の導入も大きな視点となっている（文部科学省，2015b）。この文脈からも、上記の活動には、他者との協力への意識や責任感の涵養が期待される。

(4) D 主として生命や自然，崇高なものとの関わりに関すること

「よりよく生きる喜び」として、第5学年及び第6学年で「(22) よりよく生きようとする人間の強さや気高さを理解し、人間として生きる喜びを感じること」、中学校で「(22) 人間には自らの弱さや醜さを克服する強さや気高く生きようとする心があることを理解し、人間として生きることに喜びを見いだすこと」が示されている。

後者の中学校での内容項目に関し、文部科学省（2015b）は、劣等感を様々な苦しみに打ち勝つエネルギーとし、生きる喜びに気づく鍵となることを記す。この点に関しては、「向上心，個性の伸長」と同様に、ライフキャリアの観点から「生きる」ことを考えるキャリアカウンセリングの「自己理解」の方法を取り入れ、自己の多面的・多角的理解を促進することが可能となる。

なお自己理解に関しては、小中学校での実践や、丹治（2011）の中学生から大学生を対象としたワークの提唱により広く検討されている。ここで指導者が念頭に置くべきことは、自己理解を場当たり的にするのではなく、それぞれのライフステージに応じ実施することである。各々の学校間の連携も踏まえ、個人の変容をとらえるべく、ポートフォリオなども取り入れた実践を検討していく。

IV 考 察

1. 道徳教育と教育相談の相互作用の可能性

(1) いじめ問題への関わり ～グループエクササイズと読み物資料について～

これまで述べてきたように、道徳教育に教育相談の手法などの体験的な取り組みをリンクさせることで、道徳性の育成をより立体的なものにすることができる。なかでも、SST や SGE などのグループエクササイズとの関連を多く見出すことができた。これらの活動の中でも、特に人間関係を構築する、円滑にする、修復する、などのコミュニケーションに寄与する内容は、「道徳科」と改められるきっかけとなった、「いじめ問題」について、考えたり、話し合ったりする経験につながるといえる。村山(2007)は、いじめを「学校コミュニティにおける生徒相互の人間関係の問題、教師と生徒との相互理解の問題」としてとらえ、グループエクササイズがいじめ防止につながる可能性の高いことを主張する。人間関係にはたらきかけるこの取り組みを、道徳教育に有効に取り入れていくことが肝要となる。

前述の諸富(2002)においても、「授業」としての道徳の中で、グループエクササイズを積極的に取り入れる意義が提唱されており、その利点のひとつとして「道徳的なスキル(技能)を学ぶことができるので、道徳的実践力の育成に直結」することを指摘する。さらに諸富(2014)は、エンカウンターなどの方法をあくまでも「ねらいとする価値」に触れるという「目的」を達成するための手段であることを強調する。

また、SST のプロセスでは役割に基づき、様々な立場を体験し、指導者やメンバーからフィードバックを受けつつ、適切なスキルを精選・習得していく。いじめ問題の観点からは、子どもたちの日常生活での一場面とリンクさせ、その予防・解決に向け、自分や被害者の権利が守られる、具体的・現実的で実行可能なスキルを子どもたち自身が決定し、習得していくことが必須となる。役割演技などを用いるとともに、心理劇の技法(途中から役割を交換する方法や、自分を他者に演じてもらい自己を客観的にとらえる方法など)を文脈に応じて採用することもできる。問題や子どもたちの発達段階に即し、指導者は柔軟に判断すべきである。

次に、読み物資料の取り上げ方について振り返る。押谷(2000)は、道徳教育に活用する資料に関し、「読み物資料を中心としながらも、心を開き、心を通わせる方法や自らを振り返る多様な方法、自分たちで道徳学習を進めていくための方法などについて学習できるように多様な教材を掲載する」ことを指摘する。さらに、諸富(2002)も、エクササイズでの体験と読み物資料の内容を一致させることで、子どもたちの価値意識の育成が効果的であることを述べている。

これらの先行研究より、改めて今後の実践で確認したいのは、読み物資料の活用を軽視しないこと、ねらいに即してエクササイズも含めた他の資料を併用することである。特定の資料や方法に特化するのではなく、ねらいや文脈に応じ、そのウエイトの調整が鍵となる。しかし、いずれにせよ、エクササイズを取り入れる際には、適宜シェアリングの実施が重要となる。ねらいに迫るプロセスとして、話し合ったり、自分の意見を伝えたり、他者の意見を聴いたりすることで、取り組みは充実化する。いじめなど、人間関係の問題は、意見の食い違いや、相互理解の齟齬などに起因している。これに対し、例えば、「相互理解、寛容」においては、自他の権利を伝える、聴くなどの活動のみならず、読み物資料から同様の場面を設定し、具体的な方法について、実行可能か、文脈に適しているか、など

を検討することで、誤解を解いたり、人間関係を修復したりする糸口が得られる。道徳性の深化が期待できる。中塩（2015）は、いじめ予防に対し、道徳教育での人間理解や価値理解の話し合い活動が有効であることを論じる。今後、多くの実践で検証する価値のある取り組みといえる。

（2）キャリアカウンセリングとの関連

三村（2006）により、「道徳教育とキャリア教育」を関連させる意義は示されているが、本研究では特に教育相談における「自己理解」や「自己の生き方」などの点で、道徳教育との関わりが見出された。教育相談では、自己理解のためにアセスメントツールを用いて、子どもたちが自己の興味や関心、適性、価値観などを客観的に把握できるような支援を行う。道徳教育で示されている「勤労」で、自己の「働くこと」「生きること」を吟味できれば、子どもたちの具体的なキャリアデザインにつなげることが可能になる。しかし、道徳教育ではこれに加え、上記とも関わるが、読み物資料などと併用すれば、より働くこと、そのために学ぶことを身近にとらえられる。キャリアについて議論することも可能になる。今後、子どもたちへの実践からその効果を実証していきたい。

近年の実践として、田原（2011）による価値観形成を図る体験活動を取り入れたもの、作田・中山（2012）によるキャリアモデルの提示と話し合い活動を主活動として、自らの将来に目を向けたものなどが検証されている。また、渡部・小池（2015）は、集団への参加やその中で役割遂行、自己理解、自己の長所を伸ばすことなどを、道徳教育におけるキャリア支援としてとらえる。道徳教育へのキャリアカウンセリングの有機的な活用はさらに多面的に実践が重ねられるべきである。

2. 今後の課題

本稿では、新たな学習指導要領における内容項目を概観し、道徳教育と教育相談との相互作用の可能性について検討した。一部ではあるが、教育相談で活用されているスキルや知識、取り組みには、道徳教育をより効果的かつ有機的にし、子どもたちの道徳性を高める可能性がうかがえた。

その中でも、特に重要となるのが、道徳での「学び」が、日常生活に般化されることである。吉田（2016）は、今後の道徳教育について、環境や状況による違いを考慮に入れないマニュアル的な「最善の解決策」の発見を学習目標とし、生活に柔軟に適用できる習慣ではなく、特定の場面や状況で「最善」とされる行為のシミュレーション的指導に陥ってしまう虞について言及し、それを避けるべく、現実に即したり、時間的・空間的枠組みにも着目したりする必要性を論じる。また、倉本ら（2016）は、指導のプロセスを「①道徳的価値を外形的に理解する段階」、「②道徳的価値の諸関連を構造的に理解する段階」、「③道徳的価値を現実に即して再構成する段階」に分類し、最後に自分自身が経験する具体的生活にあてはめて考えさせることが重要であると主張する。さらに、雨田（2015）も、「考える道徳」の観点から、「具体的な日常的な事象を「批判的に見」る、「考える力」を育てることが道徳教育の重要な課題であり、方法であると受け止められ、その意味で改訂は大きく期待されている」と論じ、子どもの日常性にマッチし、問題解決に向けた実践を強く提唱する。

以上の先行研究からも、実践においては、表面的な理解や考えに陥るのではなく、道徳教育での「学び」を自らの日常生活とリンクさせ、身近なものとしてとらえ、考えられるよう、機に応じてその機会を提供することが不可欠といえる。

認知行動療法で、SSTを実施した場合には、習得されたスキルについてホームワークを課し、ど

の場面で、どのくらい活用できたか、できなかったかなどを検証し、般化の促進を支援する。道徳教育と教育相談の様々な点の関連を論じてきたが、特にエクササイズやトレーニングなどが、「ただ活動した」に留まらぬよう、子どもたちが取り組みを適宜振り返るプロセスを重視した、指導者の実践に期待する。

しかし、松尾（2008）は、道徳教育と心理療法の関連において、「心理療法の知見は、道徳教育や心の教育に貢献するが、決してイコールではない」ことを強調し、応用における配慮や検討について心理学に携わる者に対し、注意喚起をしている。ゆえに、例えば道徳教育や教育相談を実践する教員と、心理学の専門家であるスクールカウンセラーなどの連携を踏まえ、各々の専門とする立場から、「心を育てる」ことの協議が必要である。道徳教育をより有機的なものとすべく、他のソーシャルサポート活用の観点も、検討事項として考察を進める。

引用文献

- 相川充・佐藤正二（編著）（2006）『実践！ソーシャルスキル教育 中学校一人関係能力を育てる授業の最前線』 図書文化
- 雨田英一（2015）「特別の教科 道徳」導入をめぐる現今の問題 東京女子大学紀要論集, 66-1, 187-208.
- 中央教育審議会（2014）道徳に係る教育課程の改善等について（答申） http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/_icsFiles/afieldfile/2014/10/21/1352890_1.pdf
- Goleman, D., Boyatzis, R. & McKee, A. (2002) *PRIMAL LEADERSHIP: Realizing the Power of Emotional Intelligence*. Harvard Business Review Press. 土屋京子（訳）（2002）『EQ リーダーシップ 成功する人の「こころの知能指数」の活かし方』 日本経済新聞社
- 長谷博文（2016）道徳の教科化における新たな指導方法に関する研究—道徳的価値に迫る問題解決的な学習を目指して— 北海道教育大学紀要（教育科学編）, 67-1, 71-79.
- 林泰成（編著）（2008）『小学校 道徳授業で仲間づくり・クラスづくり モラルスキルトレーニングプログラム』 明治図書
- 池田哲之（2016）公教育における「教科」道徳の位相—「教科」道徳の憲法的限界性— 鹿児島女子短期大学紀要, 51, 13-22.
- 倉本香・蓮尾浩之・岡村優生（2016）道徳授業のための批判的思考 大阪教育大学紀要第V部門, 64-2, 57-74.
- 松尾直博（2008）第2章 心理学から見た道徳教育 山名淳（編著）『道徳に関する諸科学の成果を生かした「道徳の指導法」に関する研究』平成19・20年度東京学芸大学教育改善推進費（トップマネジメント経費）「特別開発研究プロジェクト」研究報告書
- 三村隆男（編著）（2006）『キャリア教育と道徳教育で学校を変える！～コラボレーションによる授業改革』 実業之日本社
- 宮城まり子（2007）『心理学をまなぶ人のためのキャリアデザイン』 東京図書
- 文部科学省（2006）『生徒指導提要』 教育図書
- 文部科学省（2008a）『小学校学習指導要領解説道徳編』 東洋館出版社
- 文部科学省（2008b）『中学校学習指導要領解説道徳編』 日本文教出版
- 文部科学省（2013）道徳教育の充実に関する懇談会（第9回） 議事要旨 http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/096/gijiroku/1355445.htm
- 文部科学省（2015a）平成26年度「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」における「いじ

- め」に関する調査結果について http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/27/10/_icsFiles/afieldfile/2015/11/06/1363297_01_1.pdf
- 文部科学省（2015b）『中学校学習指導要領解説 特別の教科 道徳編』 http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/_icsFiles/afieldfile/2016/08/10/1375633_8.pdf
- 文部科学省（2015c）学校教育法施行規則の一部を改正する省令 http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2015/03/27/1356313_1.pdf
- 文部科学省（2015d）『小学校学習指導要領解説 特別の教科 道徳編』 http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/_icsFiles/afieldfile/2016/08/10/1375633_6.pdf
- 文部科学省（2015e）「特別の教科 道徳」設置の経緯と概要 『別冊初等教育資料 9月号臨時増刊 「特別の教科 道徳」の実施に向けて』 東洋館出版社
- 文部科学省（2016a）いじめに正面から向き合う「考え、議論する道徳」への転換に向けて（文部科学大臣メッセージ）について（平成28年11月18日） http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/28/11/1379623.htm
- 文部科学省（2016b）「道徳」の評価はどうか?? http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/_icsFiles/afieldfile/2016/11/16/1379579_001.pdf
- 諸富祥彦（2002）第1章 エンカウンターで道徳授業を進める 諸富祥彦・齊藤優（編著）『エンカウンターで道徳 中学校編』 明治図書
- 諸富祥彦（編著）（2014）『ほんもののエンカウンターで道徳授業 中学校編』 明治図書
- 村山正治（2007）いじめの予防: エンカウンターグループによる学級づくり—PCA グループの視点から 『臨床心理学 特集 いじめと学校臨床』 7-4, 493-498. 金剛出版
- 中元順一（2015）「特別の教科」に格上げする中学校・道徳授業の活性化への一提案—「体験的・実感的ストーリー」を取り入れた指導の在り方— 教育学論集 57, 103-133.
- 中塩絵美（2015）いじめ問題への予防等をねらいとした道徳教育—道徳授業の多様な展開を通して— 東京学芸大学教職大学院年報, 3, 141-150.
- 日本学校教育相談学会（2008）日本学校教育相談学会研修テキスト目次 <http://jascg.info/wp-content/uploads/2015/03/e5c9ee3ba93899c93efd4300d0e94f59.pdf>
- 西村宣幸（2008）『ソーシャルスキルが身につくレクチャー&ワークシート』 学事出版
- 岡田雄太（2015）「道徳」の教科化は本来の道徳教育の目的を目指すことができるのか 東京福祉大学・大学院紀要, 6-1, 67-72.
- 折出健二・福田八重（2004）いじめの予防とエンパワメント～生徒相互の対話と支援～ 愛知教育大学教育実践総合センター紀要, 7, 271-278.
- 押谷由夫（2000）㊶副読本 押谷由夫・宮川八岐（編著）『重要用語 300の基礎知識㊶ 道徳・特別活動』 明治図書
- 押谷由夫（2015）子どもの側に立ちよりよく生きる力を育む—道徳教育新時代における教育相談への期待と課題— 日本学校教育相談学会東京都支部平成27年度総会基調講演資料
- Rogers, C. R. (1980) *A Way of Being*, Houghton Mifflin Company. 畠瀬直子（監訳）（1984）『人間尊重の心理学 わが人生と思想を語る』 創元社
- 作田澄泰・中山芳一（2012）コミュニケーション行為による自己肯定感向上に関する研究—キャリア教育の視点からみた道徳授業実践を通じて— 岡山大学教師教育開発センター紀要, 2, 14-23.
- 作田澄泰・中山芳一（2016）道徳教科化に向けた今後の新しい教師教育と学校教育の在り方に関する考察—総合単元的な道徳授業カリキュラムから考える真の道徳教育の検証— 岡山大学教師教育開発センター紀要, 6,

1-10.

- 佐々木正輝・菅原正和（2009） 小学校における学校心理学的援助の方法と構成的グループエンカウンター（SGE）の有効性 岩手大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要, 8, 107-117.
- 新川靖（2016） 効果的な道德教育のための指導方法についての研究～道德学習プログラムの実践をもとに～ 関西福祉大学発達教育学部研究紀要, 2-1, 37-45.
- 征矢野達彦（2016） 道德教育の現状と道德の教科化, 「特別の教科 道德」の今後のあり方—学習指導要領の改訂を通して— 松本大学研究紀要, 14, 13-28.
- 田上不二夫（編）（2003） 『対人関係ゲームによる仲間づくり: 学級担任にできるカウンセリング』 金子書房
- 田原早苗（2011） 生き方の自覚を深め, よりよい生き方を目指す道德の時間のプログラム構成と実践—道德教育・キャリア教育の連携からのアプローチ— 教育実践研究, 21, 215-220.
- 滝充（2004） 『改訂新版 ピア・サポートではじめる学校づくり 中学校編—「予防教育的な生徒指導プログラム」の理論と方法』 金子書房
- 丹治光浩（2011） 『中学生・高校生・大学生のための自己理解ワーク』 ナカニシヤ出版
- 戸田有一（2013） いじめ研究と学校における予防実践支援 発達心理学研究, 24-4, 460-470.
- 徳永正直（2016） 道德教育の新たな可能性—「市民性教育」(citizenship education) との関係を考える— 大阪樟蔭女子大学研究紀要, 6, 45-53.
- 佟占新（2015） 「道德」の特設をめぐる議論—その特徴と社会的背景— 人間・環境学, 24, 13-28
- 渡邊満・岩尾友恵（2016） 教科化に対応する道德授業の提案—「教室という社会」に根ざす「討議による道德授業」— 就実大学大学院教育学研究科紀要, 1, 41-51.
- 渡部昌平・小池孝範（2015） 道德教育におけるキャリア教育の可能性—「私たちの道德」公開を踏まえて— 秋田県立大学総合科学研究彙報, 16, 33-42.
- 吉田誠（2016） 問題解決的な学習としての当事者研究的道德授業の可能性と課題—問題解決型の道德授業との比較から— 山形大学教職・教育実践研究, 11, 69-78.

* ウェブサイトの最終アクセス日は, すべて 2017 年 1 月 7 日である。

(いわたき だいじゅ 総合教育センター)